

名譽顧問のお言葉

ものをつくる、ということについて

ものを壊すのは簡単だが、作るのにはそれとは比較にならないくらい、手間がかかる。

そういわれても、まだ実感のない方が多いだろう。だが、自分で、あるいは仲間たちとなにかを「つくろう」として、はじめて、「つくり」あげることのむつかしさも体感できる。なにかをし遂げるには、その途中に多くの関門がある。たとえばそれが7つあるとする。この場合、「成就させる」には、それを潰すのに比べて、単純計算でも、すでに7倍の知恵と工夫と努力を要することになる。これは小学生にもわかる算数だろう。7つある関門のうちのどれかひとつを通過できなければ、それで達成は阻止されてしまうのだから。

7という数に拘るのは、人間ひとりの頭脳では7つ以上の仕事を同時に処理することは無理だからだ。つまりそれより面倒な現実を前にしても、人間は7つ以下の要素に単純化することでしか対処できない。そして7つの障害それぞれの裏には、それぞれ最低7つの困難が撚り合わさっている。そしてこの連鎖は社会全体に波及する。人の死後に49日の供養をするのはなぜだろう。たったひとりの人間の喪失を周囲が挽回するためには、一日一件処理しても49日は要する。そうした生活の知恵が、49という数字には隠されている。

若者らしい理想主義に燃えているあいだは、この単純な理屈がなかなか腑に落ちない。世の中の為に良いことなら、どうしてそれが達成できないのだろう。正義は達成されるのが当然であり、善意が通用しないのは、相手が悪い。人はともすればそう思いがちだ。だがこの不条理とも見える社会ですら、その不条理を破壊するよりは、すくなく見積もっても7倍の努力と労力とを継ぎこむことによって、かろうじて維持されている。そして、まだ実現されていない理想を達成することもまた、理想を蔑ろにするよりも、さらに7倍は困難な仕事だった。素朴な正義感は、この7の二乗の落差を見落とすことから発生する。

そしてこの見落としは、心身症を発症する原因にも結び付く。自分たちの善意を裏切る社会は腐っている。邪魔する敵がいるところではない。社会全体が自分に対して悪意を剥き出しにしている、と感じる折節さえあるだろう。そうした社会に、いわれなき敵意を抱く人があっても、不思議ではない。被害者意識は、容易に被害妄想や鬱病を引き起こす。

だが、すでに明らかだろう。皮肉にも、それ自体は真っ当な正義感が、社会への憎悪を掻き立てる。そして人が社会に対して抱いた憎悪は、早晚、7の二乗に倍加されて自分の身に跳ね返ってくる。正義感こそが、凶暴な社会的暴力へと変貌を遂げ、我が身に到来する。

合気道の稽古で、我々は何を学ぶのか。教訓のひとつは、この正義の暴力による破壊を「つくり」へと転換する訓練にあるだろう。敵を破壊し、相手との関係を破滅させるのは、実はきわめて容易い。どちらが勝者になろうが敗者になろうが、勝敗を決すればそれで完了するような仕事は、まだ「つくる」営みではない。合気道の稽古が目指すのは、破壊行

為としての勝敗ではない。勝負の遣り取りは、一見、「極限状態」と勘違いされる。だが実際にはそれはなにかを「つくる」労苦に比べれば、最低限見積もっても7分の1程度の幼稚な事業に過ぎない。その7倍の「つくる」仕事は、「一人相撲」では達成できない。「仕て」と「受け」との相互作用から何を「つくる」のか。敵意をいかに創意へと質的に転換するのか。それを追求することに稽古の原点があり、それは無限の運動へと展開する。

日常の稽古が何を指した営みなのか、反芻して問い直すこと便となれば幸いです。

6 (2902)

元人文学部助教授・元顧問 国際日本文化研究センター、総合研究大学院大学
名誉顧問 稲賀繁美